

うめたてち

山崎美花奈

みんなが green land に住むと口々に。

わたしがタイヤに乗せられて、すべる大地の真下には、虫達の溶鉱炉。そのまたお腹の中には、炭疽が小さく咳込んでいる。よそから運び込まれたやまいけどもが、肩よせはげまし息をする。乾いた咳は、固い表皮をくぐり抜け、黄色く煤けて吹き付ける。

(どこかわるいの)

(つちがあわないんだ)

(つちってだあれ)

(ああ、われわれがつちなのか、はは)

あなたは green land に住めと口々に。

タイヤは回る、きらきらがやく塵の上を走る、むこうの永久凍土はほら、いまにも空までとどきそう。

あんなつやつやの凍りの中にも、小さな生き物、見つめる先はゆめみたいなふいよるど。凍りの中は暖かい、お腹に灯りを灯している。

(またよそ者が来た)

(みんなよそ者じゃないの)

(よそ者は運河のむこうにいるよ)

(わたしたちよりも前からね)

足元がおぼつかない……

green land に住もうかな。

わたしのタイヤが大地か塵かをさらさらなでる、黄色く煤けたまちなみは、砂糖工場があった跡。その先に、バラック、バラック、バラック、ひとつ挟んで、つめたく大きな都市開発。耳の後ろの、脳髓の近くから、わたしの病気の匂いがしている。

みんなみんな、仮住まい。

(少しの間、住むだけだから)

(本当にそうかしら)

(凍りのようにかためられ、何十年もたったのよ。誰もよそ者にはなれないわ…

…)